

Soba Choko Art



Soba Choko Art 第8回 そば猪口アート公募展

総評

第8回を迎えた本展覧会には地元長野県を始め日本各地からの応募があり、加えて中国からの応募が増え、国際的な展覧会の位置付けがはっきりとしてきた。応募は10代から80代までと年齢差も幅が広く、特に20代、30代の若い作家が増えたことで、内容的にも感性豊かで技術力も高い作品が揃い、入落には十分な時間をかけた。

受賞の選考には審査員が複数の作品を選び出し、何回もの投票の中で絞

り込んで行った。賞候補に選ばれた作品は例年になく評価が高い作品ぞろいであったことをあえて記しておく。受賞に残った作品はいずれも個性豊かで、手に取ると使い勝手もよく、世界の食文化の様々なシーンで展開できる器で、この展覧会の意義と合わせて意味のあることである。

(三田村有純)

大賞

9.0×9.0×7.0 cm



白 妙

板屋成美 1991年 / 岐阜県

〈磁 / ろくろ・彫刻・銀彩〉

安曇野の凜と澄んだ空気感を表現しています。
形はそばの実と花から着想を得て、ドレスのように仕上げました。

〔選 評〕ろくろ成形の磁器の碗を、三角形と五角形風に形を整え、表側を精細な技法で削り取って、褶皺があふれ出る花に変貌していくような華麗な模様仕にしている。内側を控えめに輝く銀彩にしたことで、その華麗さを一層輝かせるのに成功している。文字通り、華麗なドレスを纏った Lady Soba Choko の誕生である。(評：金子賢治)

準大賞

7.0×7.0×7.5 cm
7.0×7.0×6.0 cm

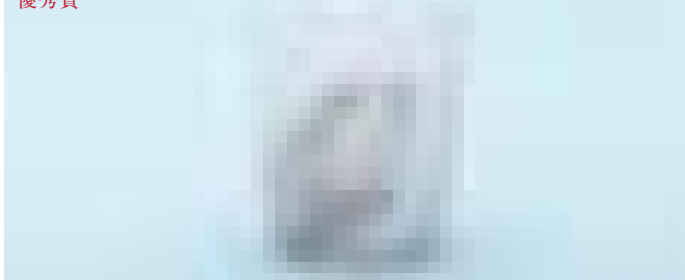
痕 跡 劉宇凡 1998 年 / 中国 (漆・木・豆腐・錫粉・夜光貝 / 錫粉時・螺鈿・しほ漆)

偶然にあらわれる効果を追求し
痕跡として美しさを表現した。

[選 評] 薄手に挽き上げた筒型の器の内側は黒の呂色仕上げとしている。外側の細い薄貝の光と色漆の乾漆粉と錫粉の上への色漆の固め塗り込みの色面の選び方とバランスが特に美しい。最初から審査員一同の評価が高く実に見事な秀作である。(評：三田村有純)

優秀賞

7.0×7.0×7.5 cm



Melting ink 塩田裕未 1995 年 / 神奈川県 (ガラス / 吹きガラス)

墨を水にたらししたイメージで制作しました。

[選 評] 吹き棒に白色ガラスを取り、その上に透明ガラスを巻き取り、吹いて形を作る(内被せ)。その際、透明ガラスの上に黒色ガラスの粉をまぶしておく。そうすると吹いて膨らんでいくにつれ形を成していく。それが偶然、動物形になって定着した。最後にサンドブラストで表面をマットに調整している。透明、白、まるでたらしこみのような薄く儚い黒。シンプルな形と清潔で濃とした色感。すばらしい作品である。(評：金子賢治)

優秀賞

8.5×6.2 cm
9.0×6.5 cm

流れる、とどまる 松岡 索 1973 年 / 長野県 (木 / 木工旋盤)

メーブル材を中心に、ウォールナット、パドック、なしなどを用いて象眼し、ガラス塗料で仕上げました。そばちよことしてはもちろん、使う人それぞれいろんな使い方、楽しみ方をしていたただけたら嬉しいです。

[選 評] そば猪口としては珍しい木工作品、滑らかな木の肌触りと軽さ、木目の美しさと優しい形の二対、リズムカルなドット柄に切り抜きはめ込みガラス塗料でのとてもとても丁寧な仕事、作品名のごとく高台から流れるようなシェイプ、口縁が端反り、最後のそばつゆまでたっぷりいただけそうな用の美である。(評：辻 育子)

特別賞

白鷹町文化交流センター
あゆむ

7.1×8.1×7.3 cm



たゆたふ 野殿英恵 1982年 / 香川県

(漆・麻布・焼錫粉 / 乾漆彫漆)

塗り重ねた色漆を闊引、自由に揺らめく澄んだ水を表現しました。

【選 評】乾漆造形で作り上げた六角の形は緩やかな曲線で外側に広がっている。外側の六面には何十層にも青漆と黒漆を塗り重ね、水が湧き上がり流れていく様を彫込み、最後に呂色仕上げでまとめた感覚は美しく優れている。(評：三田村有純)

特別賞

平成記念美術館
ギャラリー

7.0×7.0×7.0 cm



red & yellow 松木光治 1950年 / 長野県

(銅・真鍮 / 接ぎ合わせ)

冷水にさらされシャーンとしたそばに似合う形状をイメージしました。

【選 評】red は銅材、yellow は真鍮材、2種類の素材を鍛流しによる「接ぎ合せ技法」を用い、正確に形成された表面は見事に研磨され、尚且つ程よく艶消しを附している。各々の景色は意図的に相互構成され、素材の普遍的な美しさを味方に付けて、安曇野の山並や竹まいを抽象的な表現で「金属美」と「絵画性」を融合する事に成功した、センスの光る秀作である。(評：木下五郎)

審査員賞

7.5×6.5 cm



Nouvelle Cuisine 各務有香 1968年 / 東京都

(磁 / ボーセラーツ)

おそばをフランス料理にとり入れた時に合うそばちょこを作りたいと思いました。エレガントに演出することでフランス料理のテーブルにも合うおそばを提供できたら素敵ですね!!

【選 評】「ヌーベル・キュイジーヌ (仏語で「新しい料理」の意)」にふさわしく、日本伝統の食材にエレガントな彩りを与える作品。転写紙の草花の模様の上に、金彩をほどこし、雅やかに仕上げた。「フランス料理のテーブルにも合う」そば猪口の新しい可能性。そばが主役となる華やかな食卓を、思い浮かべてみるのは、楽しいことではなからうか。(評：黒岩史成)

審査員賞

10.9×10.9×6.7 cm
9.1×9.1×7.0 cm

海景色 サイツグハ 1988年 / 石川県

(銅板・真鍮板・金箔・銀口ウ・錫 / 鍛金・鍛流し)

星降る海と嵐の海をイメージして制作しました。

【選 評】銅と真鍮材を用い、鍛金技法で相対的に制作された作品である。形成した表面に、海の景色をイメージした彫金装飾を施し、各々の素材の特徴を捉え、対象的に構成、サビによる着色を湧出している。又、金箔や、銀口ウ、錫等の鍛流しの技法を多用し、複雑な加飾に成功したバランスのとれた造形力が光る。昨年の第7回展に続く入賞となり、作家の力量が評価された。(評：木下五郎)

審査員賞

9.8×9.8×5.8 cm

いとり

彩 塩井隆晴 1949 年 / 神奈川県

(ガラス / 吹きガラス)

安曇野の四季とともに移ろう彩りをイメージしました。

〔選 評〕 やや厚めのガラスの小碗型の作品である。濃い紫、薄紫、緑、青の4色の不定形の模様が美しく表されている。透明ガラス（下玉）の先端と側面にそれぞれ4色のガラスをを溶着させ、さらにその上にもう一度透明ガラスを被せ（上玉）、ただ、それを宙吹きで成形していく。そのプロセスの中で2つの4色が溶け合い、そして重なり合い、美しい透明なグラデーションを作り出す。しっかりした形と抑制された美しい色感。すばらしい作品である。（評：金子賢治）

審査員賞

8.0×8.0×6.0 cm

oribe そば猪口〔四角、八角〕 米山タカオ 1956 年 / 愛知県

(磁 / 鋳込み)

伝統的な織部釉を新感覚でシェイプされた形と融合させることによって、織部釉の深い緑の美しさを際立たせました。

〔選 評〕 そば猪口特有の高台から広がっていくさまが力強く優雅、口縁のシェイプさと角の付け方が優しい、その融合がマッチしている。Oribe の綺麗な緑一色を、形で個性をだしている、力強い八角と優しい四角のバランス、濃いそばつゆと白いそばが映える器、料理屋で使える用の美である。（評：辻 育子）

審査員賞

8.0×4.3×7.0 cm

月光城市 劉秋楊 1997 年 / 中国

(漆・木・豆腐・銀粉 / しぼ漆)

月の光が溢れる町、色々な美しさがそこにある。

〔選 評〕 やや細身のろくろ造形から覗く内側の黒漆の呂色仕上げと外側の白漆のしぼ漆によるマチエールとの対比が心地よい。白漆の中に立体的に表現した構造物が連なり、漆の新たな魅力を感じさせる優作である。（評：三田村有純）

GROWTH

目に見えない小さな命が、一生懸命弾けてきらきら出てくる姿をイメージしました。

赤繁容子

1967 年 / 三重県

9.0×7.0 cm

(陶 / ろくろ・上絵)

矢羽根

自然のリズムを表現しました。

赤羽孝也

1955 年 / 神奈川県

9.0×9.0×6.5 cm

(陶 / ろくろ)



透光白磁地紋そば猪口

白い花が一面に咲き、光と風を受けて輝き舞う。かすかに赤紫色を添えて清楚な風景…美しい。

浅井 勇

1944 年 / 東京都

10.0×10.0×5.5 cm

〈磁 / 地模様〉



分銅文様

日本の古典文様の分銅柄でやさしい感じに作り上げました。

浅井敬子

1947 年 / 東京都

8.3×8.3×6.6 cm

〈磁 / 練り込み〉



しだ 羊歯の群生

山の沢沿いを歩いていると、いつも羊歯の美しさに魅せられ、それを表現してみました。

浅井敬子

1947 年 / 東京都

9.0×9.0×7.0 cm

〈磁 / 練り込み〉



さわやかな空、ぬくもりの土

安曇野の豊かな自然をイメージして制作しました。

足立佳代

静岡県

9.8×7.3 cm

〈陶 / ろくろ〉



6piece

土によるパッチワークです。

足立喜子

1965 年 / 岐阜県

7.0×7.0×6.0 cm

〈磁 / 練り込み〉



ほころ 白は綻ぶ (2)

カラーの花をイメージして作りました。

荒井真澄

1964 年 / 神奈川県

8.9×8.9×5.4 cm / 8.9×8.9×6.2 cm

〈磁 / ろくろ〉



あさ もや 朝 靄

初めて安曇野を訪れた時に見た早朝の景色をイメージしました。

市野麻由子

1993 年 / 兵庫県

9.0×9.0×6.0 cm

〈陶 / 泥彩〉



たなごころ 掌

手の中にすっぽり包み込まれるおいしさをゆっくり味わってほしい

井筒敏彦

1963 年 / 京都府

8.0×8.0×8.0 cm

〈陶 / 天目釉〉



砂地釉鎔そば猪口

地元の素材で、そば猪口を制作しました。

岩上創一

1973 年 / 長野県

9.0×8.0 cm

〈陶 / ろくろ〉



夏の思い出

海と空をイメージして作陶しました。

牛田道子

1968 年 / 東京都

8.5×8.5×7.5 cm

〈陶 / 練り込み〉



水 天

水中と空中というテーマで制作しました。

大塩まな

1996 年 / 奈良県

8.3×6.0 cm

〈陶 / 描き落とし・象嵌〉



そばの実 ざらざら

手ざわりはざらざらと蕎麦の実の粒のように。
ゆがんだ形も愛嬌です。

大城亜也子

1968 年 / 東京都

8.5×8.5×6.0 cm

〈陶 / 練り込み・象嵌〉



赤楽黒楽そば猪口揃

安曇野の夕景、夜景をイメージしました。

鬼窪一利

1951 年 / 長野県

7.0×8.0×7.0 cm

〈陶 / 泥しう造形〉



梔子

梔子の実をイメージした形にして
制作しました。

鬼窪真史

1982 年 / 長野県

9.0×8.0×9.0 cm

〈陶 / 手捏ね〉



緑 風

森の中で、ゆっくりと深呼吸
「癒し」の時間をイメージして制作しました。

香川清美

1963 年 / 兵庫県

10.0×10.0×7.3 cm

〈陶 / 貼花〉



空色の雫

安曇野の青空の青と夕やけ空の赤をイメ
ージしています。空からの恵みを表現しました。
光にかざすと彫刻模様のところがまのり
と透けます。

梶間智絵

1986 年 / 京都府

6.0×6.0×9.0 cm

〈磁 / 鑄込み〉



紅

漆器の風合いを磁器でできないかと思い、制作しました。

河合麻衣

1984年 / 愛知県

7.8×7.8×5.8 cm

〈磁 / 鑄込み〉



幻想

思いさまよう様子

木口泰広

1985年 / 長野県

7.5×8.0×7.5 cm

〈陶 / ろくろ〉



野路の花

長野の美しい景色の中にひっそりと咲く花々を描いてみました。

菊地由美子

1953年 / 千葉県

7.5×7.5×7.5 cm

〈磁 / 筆上絵〉



そばの実

そばの実の図をポイントに、全体でそばの実の素朴で渋く、そして可愛い印象を表現しました。

菊政伸子

1951年 / 東京都

9.2×9.2×6.5 cm

〈陶 / 白化粧・還元焼成〉



彩色絵高麗そば猪口

彩色しましたが、還元焼成して御本を出し、誰か楽しく美しいお蕎麦を食べて欲しいと思いました。

熊中ひとみ

1954年 / 広島県

8.5×8.5×6.7 cm

〈陶 / 粉引き・還元焼成〉



ほのおは 炎映ゆ

土と炎の生み出す原始的な美を感じられる作品にしました。

小林彩弓

1990年 / 愛知県

8.5×8.0 cm / 8.0×8.0 cm

〈陶 / ろくろ・焼締め〉



めぶき

自然の景色を思い浮かべながら制作しました。

酒井智也

1989年 / 愛知県

8.0×6.5 cm / 9.0×7.5 cm

〈陶 / ろくろ〉



水彩

水に潜って目を開けたときに映る世界を感じて頂けると幸いです。

酒井麻衣

1992年 / 兵庫県

9.2×7.0 cm

〈陶 / ろくろ・鎗〉



山びこ

麦畑の中でのこだまをイメージしてみました。

坂口禮子

1941年 / 長野県

7.8×7.8×6.0 cm

〈磁 / ろくろ〉



暗闇に

まっ暗闇に見えるもの。
それを形にしてみたいと思いました。

塩井隆晴

1949年 / 神奈川県

8.9×8.9×6.5 cm

〈陶 / ろくろ〉



緑彩猪口

食卓を彩る器としての素朴な輝きを
表現できるように、心掛けました。

重村麻喜

1982年 / 山口県

8.0×8.0×6.4 cm

〈陶 / 手びねり〉



釉裏紅象嵌そば猪口

そばの実りのイメージで制作。

篠田明子

1962年 / 長野県

9.0×9.0×7.0 cm

〈磁 / 釉裏紅・象嵌・ろくろ〉



彩何猪口

楽しくなるポップな文様。
銅釉（辰砂と織部）のペア

篠田弘明

1958年 / 長野県

8.2×7.6 cm

〈磁 / ろくろ・焰火化粧〉



黒鉄釉そば猪口

鑄物の器肌を陶器で表現しています。

柴田恭久

1977年 / 京都府

8.7×8.7×6.4 cm

〈陶 / ろくろ〉



北帰行

白鳥が安曇野から飛び立って帰る。

関 薫

1959年 / 長野県

8.0×8.5×8.0 cm

〈陶 / ろくろ〉



ダンス・ダンス

楽しい食事をイメージして制作しました。

高木彩子

1950年 / 東京都

8.7×8.7×7.0 cm

〈陶 / ろくろ〉



青と黒

自然的、人工的、対照的な作品を組とすることで、より一方を感じていただけたらと。

田中悦子

1979 年 / 静岡県

8.3×8.3×7.2 cm / 9.0×9.0×5.8 cm
〈磁 / ろくろ〉



水玉の夜

夏の夜に見る夢をあらわしてみました。

田原形子

1960 年 / 東京都

7.0×9.0×11.0 cm / 7.0×11.0×9.0 cm
〈陶 / ろくろ・手びねり〉



溪 流

安曇野の豊かな自然がはぐむ溪流で打つ格別なそばをイメージして作りました。

椿 萌

群馬県

8.5×7.5×6.0 cm
〈陶 / ろくろ〉



花 舞

丸みを帯びたフォルムと淡い色彩を用いて、風に舞い散る花々の美しさと儚さを表現しました。

土居万里子

1989 年 / 北海道

8.8×8.8×7.3 cm
〈陶 / ろくろ・上絵〉



天流悠水

- ・ 外面的温度で内側の温に影響しない二重構造
- ・ 天竜川の流れを想像して制作。

唐植霖

1990 年 / 京都府

9.3×7.5 cm
〈磁 / 二重焼、透かし彫り〉



そば猪口-zikibo-

気張らない姿も愛らしい。そう思わせてくれるそば猪口です。

富田 亮

1991 年 / 愛知県

8.0×9.0×6.5 cm
〈磁 / 鑄込み〉



unit

ソバのシンプルな素材とそこから生まれる、豊かな重なりをイメージしました。

中川夕花里

1992 年 / 岐阜県

7.7×6.4 cm
〈磁 / ろくろ〉



海と夕焼けの水面

海の色と、夕焼けに染まる海の色をそれぞれ表現しようと試みました。

中西美美

1984 年 / 和歌山県

9.5×9.5×8.1 cm
〈磁 / ろくろ・エアブラシ〉



パッチワーク風ソバチヨコ

農作業の時の昔の着物をイメージしました。

二村 藤枝

1952 年 / 愛知県

7.2×7.2×6.8 cm

〈陶 / 練り込み〉



昼夜帯

昔、山間の畑でそばの実を収穫する人のきもの姿（帯）をイメージ。

ひが直美

1968 年 / 愛知県

7.0×7.5×8.0 cm

〈陶 / たたら〉



土の音色

さまざまな恵みをもたらす大地の神秘を表現したいと思いました。

初澤 勉

1968 年 / 長野県

8.3×8.3×6.7 cm

〈陶 / ろくろ〉



里の華

初夏の山里に咲く花をイメージして作りました。

平田邦子

1949 年 / 東京都

10.0×10.0×7.0 cm

〈陶 / 掻き落し〉



Relief cup A

彫刻の陰影で文様を表しました。

花塚哲男

1936 年 / 長野県

8.0×8.0×7.5 cm

〈陶 / 陶土貼りつけ・掻き落し〉



涼

初夏の風をイメージしました。

藤井未央

1983 年 / 富山県

8.0×8.0×6.8 cm / 7.8×7.8×6.5 cm

〈磁 / ろくろ・イッチン〉



安曇野・令和の春

新しい年号の意味合いと安曇野の春をイメージして作りました。

原田せつ子

1945 年 / 静岡県

8.5×8.5×7.0 cm

〈陶 / 練り込み・たたら〉



薔薇貫入釉 陶胎漆器そば猪口

涼しげな貫入青磁に、漆の温かみを加えました。口当たりもやさしくなりました。

本間友幸

1975 年 / 長野県

8.7×8.7×6.5 cm

〈陶・漆・長石 / 貫入〉



ピースなそば猪口

ジグソーパズルと同様に、ピース1つ1つをつなぎ合わせて制作しました。

松井真治

1984年 / 神奈川県

8.0×8.0×6.0 cm

〈陶 / 練り込み・貼り合せ〉



安曇野の春

安曇野の春の山の残雪、新緑、桜などの花をイメージして制作しました。

三浦靖子

1956年 / 石川県

9.5×9.5×6.5 cm

〈陶 / ろくろ〉



絆

成形方法と釉薬は同じで磁器の土と陶器の赤土を使ってお揃いのそば猪口にしました。二人で使っても一人で土の違いを比べてみるのもおもしろいです。

水野育子

1981年 / 神奈川県

8.0×8.0×6.4 cm / 8.0×8.0×6.6 cm

〈磁・陶 / ろくろ〉



life

瑞々しくキメの整った真っ新たな美しさと、時間の経過を物語るムラを含んだ朽ちゆく姿の美しさ。相反する2つの美と、心地の良いかたちを探りました。

三宅日加里

1990年 / 岐阜県

8.2×8.0×6.1 cm

〈磁 / ろくろ、銀彩〉



太郎と花子のそば器

ひと握りの土が想いの形に変わる。ふるさとの上田釉を想い陶で形の上に紡いだ、紋様を纏った。

宮島正志

1953年 / 東京都

10.0×10.0×7.0 cm

〈陶 / 釉彩〉



Hidden gem 秘宝

骨をイメージして制作しました。

ミリツァ イエヴティッチ

1994年 / 岐阜県

6.7×6.7×5.8 cm

〈磁 / 鋳込み〉



異文化交流

アフリカの大地には、ヒエ・アワ・ソバの実を喰べる人々がいます。喰べ方は異なっても食文化は同じです。

森瀬和廣

1949年 / 岐阜県

8.5×8.5×8.3 cm

〈磁 / 染付〉



しろほひがらもん 白頬日雀紋

日雀が鳥の中でも好きで、朝のキラキラした時間に針葉樹を飛び回るのをイメージしました。

矢野正久

1984年 / 京都府

8.6×7.9 cm

〈磁 / ろくろ・下絵・上絵〉



練り込みそば猪口

練り込みから成形まですべて自分で
やりました。

山内美月

2003 年 / 長野県

8.5×7.5 cm

〈陶 / たたら・練り込み〉



流れるように

植物や川の自然の流れをイメージして
制作しました。

山野実優

1997 年 / 兵庫県

9.0×9.0×6.5 cm

〈陶 / ろくろ・鎚〉



白い花

安曇野の青空とそばの白い花を
優しく表現しました。

山本理恵子

1953 年 / 岐阜県

9.0×9.0×7.5 cm

〈陶 / ろくろ〉



水目桜造蕎麦猪口一対

挽物技法で仕上げた木地に外側は拭漆、
内側は塗立で仕上げました。

浅賀貴宏

1983 年 / 福井県

6.0×6.0×6.7 cm

〈漆・水目桜 / 挽物・拭漆・塗立〉



籃胎砂子そば猪口「悠」

竹ひごの編み模様と散らした光の奥行き、
素材の印象を大切に仕上げました。

石村有弓

岡山県

8.1×5.8 cm / 8.2×5.9 cm

〈漆・竹・麻・銀箔・和紙 / 籃胎・砂子〉



彩

古民家から眺める安曇野の風景を
イメージして

伊藤敦欣

1947 / 長野県

6.3×6.3×6.5 cm

〈漆・金箔・銀箔 / 蠟色仕上げ〉



ネジバナ

暖かい日差し野原で揺れるネジバナを
イメージして制作しました。

川田 勉

1978 年 / 香川県

8.4×8.4×7.3 cm

〈漆・麻布・檜・シナ合板・金粉 / 存清〉



溜塗線文そば猪口

下地漆や色漆を用い「線」をデザイン
しました。その下地漆の凹凸が心地よく
手におさまると思います。

黒田昌吾

1963 年 / 富山県

7.0×7.0×7.0 cm

〈漆・栃 / 溜塗り〉



無 垢

陶器の肌質、木のあたたかみ、漆のたたずまい。眺めているとドキドキする、手の平に丸くおさまるそばちょこになりました。

後藤千佳子

1976 年 / 石川県

8.5×6.6 cm

〈漆・木・鶏卵・銀粉 / 研ぎ出し・きんま〉



雪の中へ

①安曇野のふりしける雪をイメージして制作しました。
②おそばを食べるのに雪がもつ冷たさを感じられたら
おいしくなるのではと思い制作しました。

齋藤弘茂

1976 年 / 石川県

7.7×7.7×7.5 cm

〈漆・木・布・卵殻・貝・金 / 卵殻〉



地球-生きとし生けるものすべてのふるさと-

使っていくうちに起こる「景色の変化」も楽しんでもらえるように意識して制作しました。

佐々木響子

1992 年 / 岐阜県

8.0×8.0×7.0 cm

〈漆・錫粉・蒔絵〉



宥 和

漆の持つ独特の表現を追求した。

鄭重

1998 年 / 中国

8.5×8.5×8.0 cm

〈漆・木・豆腐・金箔 / しぼ漆〉



イスタンブールの花猫

イスタンブールの猫達は
孤独と独自の世界を持つ

趙悦

1988 年 / 中国

7.0×7.0×7.5 cm

〈漆・木・豆腐 / しぼ漆〉



月 彩

やさしい月の光の中で夜散歩
月華の楽しさをイメージ

竹森公男

1949 年 / 長野県

8.5×5.5×7.0 cm

〈漆・木 / 蒔絵・螺鈿〉



洗

清流の水が、わきたち光る様を
貝の煌めき等で、表現してみました。

谷口元美

1960 年 / 京都府

8.0×8.0×6.0 cm

〈漆・麻布・鮫貝・銀粉 / 乾漆・螺鈿・蒔絵〉



朝 露

朝の霧が凝縮した露と
そこに映る光の形を表現した。

陳明宗

1980 年 / 台湾

7.5×7.5×7.0 cm

〈漆・木・錫 / 変り塗り〉



月 食

地球の影が月を呑み込み、
神秘的な光景となる。

田 潤 竹

1998 年 / 中国

8.0×8.0×4.5 cm

〈漆・木・豆腐・金粉 / しぼ漆〉



溜塗そばちょこ「光明」 こうみょう

少しでも光を通すような漆器を作りたくて
制作しました。

中田陽平

1982 年 / 香川県

8.7×8.7×6.8 cm

〈漆・栃・アクリル・樹脂 / 溜塗〉



蕎麦の化身

そばの麺を素地にして作り上げました。

西岡 大

1975 年 / 香川県

5.5×5.2×7.3 cm

〈漆・そばの麺 / 巻胎〉



四季とともに

農村の風景をドライブする
イメージで表現しました。

藤田文裕

1978 年 / 北海道

7.7×7.7×6.3 cm

〈漆 / 乾漆・蒔絵〉



代田一望

安曇野の田植えを待つ代田風景

堀 正敏

1949 年 / 新潟県

8.0×8.0×7.4 cm

〈漆・銅線・麻・和紙・銀粉 / 乾漆〉



宝石蒔絵「牡丹に蝶」

京都オパールという新素材を使用し、
古典的な図を描く事で、
生まれる新しい表現に挑戦しました。

松田敏明

1982 年 / 石川県

9.5×9.5×11.0 cm

〈漆・木・金粉・銀粉・オパール粉 / 蒔絵〉



夜あけ前のそば畑

夜明け前のそば畑のイメージで作りました。

横瀬孝子

1944 年 / 神奈川県

8.5×6.5 cm

〈漆・桂 / 卵殻・乾漆粉蒔き、青みがき、黒呂色みがき〉



花の息吹

花が咲く時に見える形。
花びらのヒトヒラ ヒトヒラは呼吸をしている。

李芷欣

1998 年 / 中国

7.5×7.5×8.0 cm

〈漆・木・豆腐 / しぼ漆〉



夜 光

月や星空、オーロラなどが
夜湖に映された光を表現しました。

李沛沛

1992 年 / 東京都

6.6×6.6×6.6 cm / 6.8×8.5×6.8 cm
〈漆・麻布・銀粉・白蝶貝 / 乾漆・螺鈿・蒔絵・墨流〉



かん
閑

風でさらさらと鳴るコゴミの葉をイメージして
制作しました。

李 明諺

1990 年 / 香川県

9.2×9.2×7.7 cm
〈漆・布・炭粉・乾漆粉・錫粉 / 乾漆・きんま四分一塗〉



今 夕

植物と金属の融合、
古代と現代技術とのぶつかり。

劉麗晨

1998 年 / 中国

7.0×7.0×8.0 cm
〈漆・竹・豆腐・金箔・錫粉 / 錫粉蒔・金箔貼り〉



日 暈 幻 曇

漆を媒介として異なる素材を融合し、
多種多様で豊富な触感と視覚性が
表現されています。

廖家慶

1975 年 / 台湾

8.6×9.6×9.2 cm
〈漆・樺木地・麻漆・糸・貝・純金銀粉 / 金銀蒔地・麻糸髹漆・螺鈿・青貝変塗〉



古 希

70才を機に制作
伏せて有明山をイメージ

小口富雄

1948 年 / 長野県

7.1×10.0 cm / 8.5×8.0×8.5 cm
〈ヒバ / 圧着自然樹脂塗料生地仕上〉



櫛 拭 漆 そ ば 猪 口

シンプルな形に仕上げ、
木目に錫粉を埋めました。

松本宇紘

1991 年 / 京都府

6.7×7.0 cm
〈櫛・漆・錫 / 挽物・拭漆〉



春の雪溶け

降り積もった雪が春になり溶け出し、
恵みの水となる様子をイメージして
制作しました。

荒牧彩花

1996 年 / 兵庫県

9.7×9.7×6.5 cm
〈ガラス / サギング〉



水 流

ガラスが溶け合っている
自然な模様をもちいて制作しました。

安藤項司

1995 年 / 長野県

9.0×9.0×7.5 cm
〈ガラス / 吹きガラス〉



えびいろ 葡萄色

紫の上は葡萄染にやあらむ、
色濃き小桂薄蘇芳の細長に
御髪のためれるほどこちたくゆるるかに

伊久美千恵

1971年 / 東京都

8.8×9.5×6.8 cm

(ガラス / 吹きガラス)



TEN MOKU

日本の美しき精神文化
「静寂閑雅」を表現した作品。

市川知也

1974年 / 富山県

7.0×8.0×8.0 cm

(ガラス / フロー・カット)



Bark

樹皮の力強い質感を
表現してみたいと制作しました。

井之下 翔

1991年 / 長野県

7.5×8.0×7.5 cm

(ガラス / 吹きガラス)



おいしいフルーツ

アレルギーで、食べられなくなった果物への
想いをこめて。

上橋由佳

1980年 / 長野県

9.0×9.0×7.4 cm

(ガラス / 吹きガラス)



Teal

心はずむ食卓になるような
そば猪口を目指しました。

川上貴久

1977年 / 神奈川県

8.4×8.4×6.6 cm

(ガラス / 吹きガラス)



first contact

安曇野の私の first contact. 私は安曇野に行った事
がなく今回初めて調べました。緑…安曇野のきれいな
自然。白…今まで接点がなく、真っ白。黄…友好な色。
白の部分 (知らない部分) が少しずつなくなっていくイ
メージ (そういう風になると良いと思います) で制作しました。

神原政美

1984年 / 神奈川県

7.0×7.5×6.5 cm

(ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト)



春の小川

安曇野の小川で戯れるめだかと水玉を
イメージしました。

佐々美詠子

1960年 / 埼玉県

8.0×6.0 cm

(ガラス / パート・ド・ヴェール・エナメル絵付け)



澄 処

安曇野のおいしいそばの育つ清流と、
そこに住まうホタルたちを眺めながらする
そばという風景を思い浮かべながら
制作しました。

芝崎由華

1996年 / 兵庫県

8.3×8.3×7.0 cm

(ガラス / パート・ド・ヴェール)



深 溪

渓谷で躍動する生命のきらめきを表現しました。

白藤晴久

1965 年 / 滋賀県

7.5×7.5×6.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト〉



紡 ぐ

細い糸の様な、線のような、かけがえのない一瞬を日々紡いでゆく

関 真梨子

1984 年 / 長野県

7.8×7.2 cm

〈ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト・カット・金彩〉



花蝶風月

夜の花畑で舞う蝶のイメージ

周亮瑜

1993 年 / 長野県

7.5×7.5×7.8 cm

〈ガラス / サンドブラスト〉



佳 景

広がる空、向日葵、夕日、涼やかな水…
そんな夏の色を混ぜこんで、楽しい気持ちになってもらえると嬉しいですよ。

新倉あきは

1992 年 / 神奈川県

8.0×7.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



菊市松

持ちやすく、
和風で煌びやかさのあるものと、
デザインしました。

沼田たまえ

1985 年 / 北海道

8.5×8.5×8.0 cm

〈ガラス / 切り〉



六角文そば猪口

シンプルな六角形の模様の中に、
ガラスらしい遊び心を加えました。

松尾一朝

1979 年 / 山梨県

8.8×8.8×6.0 cm

〈ガラス / キルンワーク・コールドワーク〉



夜空に浮かぶ星

暗い夜空をずっと眺めていたら、
たくさんの星の輝きが見えた。
美しかった。

三留 舞

1986 年 / 神奈川県

8.0×8.0×7.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



岩魚・山女

清流に住む溪流魚の色合いを
イメージしました。

嶺井海音

1991 年 / 長野県

7.0×7.0×8.0 cm

〈ガラス / 吹きガラス〉



水 紋

晩秋の冷たい雨を表現しました。

山本弥生

1964 年 / 東京都

9.5×9.5×6.5 cm

〈ガラス / 吹きガラス・サンドブラスト〉



寄り添う

生活、異素材、二つの猪口、
各々に“寄り添う”を表しました。

石松瑞幾

1995 年 / 新潟県

7.5×7.0×7.0 cm / 7.0×6.5×6.5 cm

〈銅、木 / 銅型石膏埋没鋳造〉



秋、風土雨

自然のなかで季節のうつかりを感じられる
作品をつくりました。実りある季節、風の音。
土の匂い、恵みの雨を手のうちで感じてもら
いたい。

岡澤治季

1982 年 / 長野県

9.0×6.0 cm

〈銀・牛革 / 彫金〉



折りと曲げのちよく

不等辺五角形を基本形とし
折りと曲げて制作

不破健人

1941 年 / 岐阜県

10.0×10.0×6.5 cm

〈銀〉



銀打出器

安曇野を流れる溪流を
イメージして制作しました。

星 飛鳥

1997 年 / 東京都

8.1×8.1×6.2 cm

〈銀・銅 / 銀金・象嵌・空目金〉



夜の雨

静かな夜は小雨が降り、
雨滴は見えなかった。
雨の音がした。

曾于真

1983 年 / 台湾

9.0×9.0×6.5 cm

〈銅 / 七宝焼・鍛造〉



なつめ 棗 椀

椀の底に沈む棗がアクセントになっています。

藤森和孝

1963 年 / 長野県

7.0×4.5 cm

〈銅 / 七宝焼・鍛金〉



moon drop

日によって変化する月の表情をイメージして
制作しました。

山添恵菜

1991 年 / 兵庫県

8.0×8.0×7.0 cm / 7.0×7.0×7.0 cm

〈銅・金箔・銀箔 / 七宝焼・鍛金〉

Soba Choko Art

第8回 そば猪口アート公募展

2019年 10月19日(土)～11月17日(日)

休館日：月曜日（祝日の場合は開館）、

祝日の翌平日（10月23日（水）は開館）

観覧料：一般：410円 高大生：310円

中学生以下、70歳以上の安曇野市民、障がい者及び

その介助者1名 無料

※本館常設展込み

主催：公益財団法人 安曇野文化財団 安曇野高橋節郎記念美術館

共催：安曇野市教育委員会

協力：信州安曇野「新そばと食の感謝祭」実行委員会、

平成記念美術館 ギャラリー、

白鷹町文化交流センターあゆーむ

協賛：株式会社平成建設、白鷹町文化交流センターあゆーむ

審査会：2019年8月19日（月）、20日（火）

審査員：三田村有純、金子賢治、木下五郎、辻育子、黒岩史成

募集期間：2019年7月12日（金）～19日（金）消印有効

応募点数：221点（応募者数193人）

巡回展：

平成記念美術館 ギャラリー

東京都世田谷区桜 3-25-4、電話 03-3426-1103

会期 11月25日（月）～2020年1月15日（水）

白鷹町文化交流センターあゆーむ

山形県西置賜郡白鷹町大字鮎貝 7331 電話 0238-85-9071

会期 2月（予定）



安曇野高橋節郎記念美術館

〒399-8302 長野県安曇野市穂高北穂高408番地1 TEL.0263-81-3030 FAX.0263-82-0551

http://setsubo-museum.com

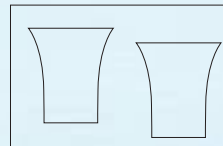
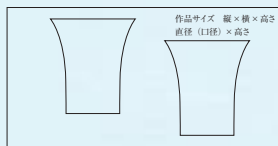
信州安曇野の「そば」は全国的にも名高く、安曇野観光の目的として多くの人に親しまれています。そば猪口は、そばを食べる日常的な雑器でありながら、美しい細工が施され、味覚とともに視覚を楽しませる多彩なものとして好まれてきました。

本公募展は、そばを食するに欠かせない雑器「そば猪口」に着目し、広く一般から自作の作品を募集するものです。第8回となる今年は193名、221点の応募がありました。その中から厳選した125点の個性あふれる「そば猪口アート」をお楽しみください。

入選者（50音順）

赤繁 容子	羽孝 也	浅井 勇	浅井 敬子	浅賀 貴宏	足立 佳代
足立 喜子	羽井 真澄	荒牧 彩花	浅藤 項子	伊久美 千恵	石松 瑞幾
石村 有弓	板屋 成美	市川 知也	市野 麻由子	井筒 敏彦	伊藤 敦欣
井之下 翔	岩上 創一	牛田 道史	大塩 有香	大城 重也	岡澤 治季
小口 富雄	鬼窪 一利	川上 史久	各務 有香	香川 清美	梶間 智絵
上橋 由佳	河合 麻衣	川上 貴久	川田 勉	神原 政美	木口 泰弘
菊地 由美子	菊政 伸子	熊中 ひとみ	黒田 昌吾	後藤 千佳子	小林 彩子
サイツグ ハ	齋藤 弘茂	酒井 智也	坂口 禮子	坂口 禮子	佐々木 響子
佐々美 詠子	鄭 重	塩井 隆晴	塩田 裕未	重村 麻喜久	篠田 明子
篠田 弘明	芝崎 由華	柴田 恭久	趙 悦	白藤 晴久	関 薫
関真 梨子	曾 于真	高木 彩子	竹森 公男	田中 悦子	谷口 元美
田原 形子	陳 明宗	周 亮瑜	椿 公萌	田 潤竹	土居 万里子
唐 植霖	富田 亮	中川 花里	中 陽平	中西 美美	新倉 あきほ
西岡 大	二村 藤枝	沼田 たまえ	野殿 英恵	初 澤勉	花塚 哲男
原田 せつ子	ひが 直美	平田 邦子	藤井 未幸	藤田 文裕	藤森 孝一
不破 健人	星 飛鳥	堀 正敏	藤本 友幸	松井 真治	松尾 一朝
松岡 素	松木 光治	松田 敏明	松本 宇紘	三浦 靖子	水野 育子
三留 舞	嶺 海音	三宅 日加里	宮島 正志	ミツアイエリ	森瀬 和廣
矢野 正久	山内 美月	山添 恵美	宮野 実	山本 弥生	山本 理恵子
横瀬 孝子	米山 夕力	李 芷欣	李 沛沛	李 明諤	劉 秋楊
劉 宇凡	劉 麗晨	廖 家慶			

凡例



タイトル 名前 生まれ年 / 現住所 (材質 / 技法)
作者コメント

タイトル

作者コメント

名前

生まれ年 / 現住所

作品サイズ 縦×横×高さ 縦径 (口径) × 高さ
(材質 / 技法)